

# 明治・大正期の裁縫教育における教育的価値づけの変化

—ドイツ新教育の受容に着目して—

教職開発コース 清 重 め い

Changes in Educational Valuation of Sewing Education in the Meiji and Taisho Periods:  
Focusing on Acceptance of New German Education

Mei KIYOSHIGE

The purpose of this study is to clarify the changes in the educational value of sewing education from the Meiji period to the Taisho period. This study will examine Junko IMAMURA's theory of sewing education and clarify how the new education in Germany is accepted in it. The examination of historical materials pointed out that it was considered natural for girls to just learn sewing before the 30's of the Meiji period, but from around the 30's of the Meiji period, sewing education had been talked about as having two values, practical value and emotional value. Moreover, it was revealed that the acceptance of the idea of muscle movement of Wilhelm August Lay was seen.

## 目 次

- 1 はじめに
  - 2 明治期の裁縫教育論
  - 3 今村順子の裁縫教育論
  - 4 「ドクトル・ライ」の筋肉運動主義
    - A 筋肉運動主義
    - B 裁縫教育論における筋肉運動主義
  - 5 おわりに
- 注

### 1 はじめに

本稿は、明治期から大正期にかけて、裁縫教育の教育的価値づけがどのように変容したのかを明らかにすることを目的とする。その際、今村順子の裁縫教育論に着目する。また、今村を含めた幾人かの裁縫教育家がその裁縫教育論の中で引用していたヴィルヘルム・アウグスト・ライ (Wilhelm August Lay) の筋肉運動主義に着目することで、裁縫教育におけるドイツ新教育の受容についても指摘する。

戦前の女子教育では、教育の指針として「良妻賢母」が掲げられ、その中でも裁縫科は必須の教科として据えられてきた。深谷によれば、良妻賢母の思想とは、学制から始まる近代の産物というよりはむしろ江戸時代の教育から連続性をもつ思想であり、儒教的なもの

と西欧の女性像の複合思想であった<sup>1)</sup>。そして、その思想は小山によれば、女子教育振興の論拠であると同時に、教育内容の限定をもたらすものであった<sup>2)</sup>。また、男女の心理的・生理的差異を根拠に、女性の天職を家事労働と規定し、男女の同権を言葉の上では掲げつつ、女性の活動は男性のそれと異なり経済的生産を生まないこと、国家に対する貢献が間接的であることから、女性は「第二次的存在」と位置づけられていた<sup>3)</sup>。つまり、良妻賢母主義は、江戸時代以来の日本固有の思想と明治以降の新たな女性観と融合しつつ、制限を内包しながら、日清・日露戦争という戦争経験などを経て女性を国家主体として位置づける立場へと少しずつ変容してきたということになる。こうした中で女子教育へ関心が高まると共にその教育内容に関して、家事裁縫といった従来のいわゆる女子向けの内容だけでなく、男子中学校で配分の大きい理科・数学といった普通教育の内容も追加する動きへとつながった。しかし、依然として家事裁縫といった実技教育に対する需要は根強く、普通教育との時間配分に関するせめぎ合いの中で、その教育的意義が問い直されるようになっていった。つまり、女子教育の中核と言うべき裁縫教育に関する議論の中にも何らかの変化が生じていたと予想ができる。その変化を本稿では明らかにしたい。

では、従来の裁縫教育史研究はこれまで何を明らか

にしてきたのか。近代以降を対象とした裁縫教育の代表的な史的研究としては、江戸時代から戦後にかけての家事裁縫教育・家庭科教育全般の動向を通史的に明らかにした常見育男の研究<sup>4)</sup>や、近世から近代へと移行期における裁縫教育の実態を明らかにした関口富佐の研究<sup>5)</sup>、明治から戦中にかけての裁縫教育の実態を明らかにした田中陽子の研究<sup>6)</sup>が挙げられる。明治期は、近代学校教育制度の成立期だが、その中で裁縫教育は、学制公布以降、女子の不就学問題を改善する手段として用いられた経緯が明らかにされている<sup>7)</sup>。また、常見は、そうした中で学校における教授内容を系統化する先陣を切った人物として、渡邊辰五郎と朴澤三代治を位置づけた<sup>8)</sup>。

大正期に関しては、洋裁教育に関する研究と、木下竹次の裁縫教育に関する研究がある。

洋裁教育に関する研究は一定程度蓄積があるが、例えば桑田直子は、市民の洋装化が進みつつあった1920年代における成田順の洋裁教育論を取り上げ、当時登場しつつあった既製服の管理能力の育成という要請への対抗として成田が「主婦裁縫」イデオロギーを利用したことを指摘した<sup>9)</sup>。また、上述の田中は、小学校裁縫科における洋裁教育について、明治中期から大正中期にかけて和裁の応用として洋裁を教材化していったこと<sup>10)</sup>、大正後期から昭和戦前期における小学校裁縫科で洋裁教育が推進された背景として、服装改善運動や既製服の登場があったこと、さらに生活に即した学習という観点から制作者たる児童自身のための子ども用服の教材が使用されたこと<sup>11)</sup>を指摘した。

木下の裁縫教育に関して赤崎真弓らは、木下の4つの裁縫教育関連書籍を検討することで、教授ではなく学習へ、すなわち児童生徒たちの主体的な学習法を目指したことを<sup>12)</sup>、多々納道子らは、他の裁縫教授書同様、木下も裁縫科の価値を実用上の価値と精神陶冶上の価値によって説明したことを指摘した<sup>13)</sup>。福田公子らは、木下の評価観は学習者の人格形成が目的であり、裁縫科の場合は「裁縫心」の自律的発展を目標としていたこと<sup>14)</sup>を、赤崎真弓らは、木下が裁縫科を衣生活全般に関わる内容として合科学習で実施していたことを明らかにした<sup>15)</sup>。他にも、裁縫科の教員養成<sup>16)</sup>や木下の影響を受けた中沢か寿めについて取り上げた研究<sup>17)</sup>がある。木下の教育論の限界としては、具体的な教授法に落とし込めていなかったこと、実技的技能の習得が不十分になってしまう教授法であったこと、自主学習に対応した指導法を確立できていなかったことが指摘されている<sup>18)</sup>。

このように大正期は、市民洋装の普及に伴って洋裁教育論が浮上したこと、そして大正新教育との関連から、木下が児童中心の学習法を裁縫教育に取り入れたことが明らかにされており、明治期と比較して裁縫教育の議論が大きく動いたことがわかる。

以上のように従来の裁縫教育史は、制度を中心とした通史的研究や裁縫の教科書・教授書内容の変化を分析した研究、幾人かの代表的な裁縫教育実践家を焦点化した研究が主であった。他方、明治期から大正期に到るまでの裁縫教育論の変化を、詳らかにできていない。洋裁や児童中心主義といった大きな転換に焦点が当てられているが、裁縫教育論の主流における変化が見えてこないのが現状である。よって本稿では、明治期から大正期にかけての一般的な裁縫教育論における教育的価値づけの変化を明らかにしたい。

明治後期には、女子が裁縫を学ぶことは「天分」として自明視するのではなく裁縫を教育に位置づける中で、裁縫教育の価値が生活に必要な技術を身につける実用的価値だけでなく、徳性の涵養といった精神陶冶としての価値も挙げられるようになった。そうした裁縫教育論を確立させた実践家の代表的な人物として、今村順子が挙げられる。今村の著した教授書は、当時女学校の半数ほどで採択されており<sup>19)</sup>、本稿でこれらを検討することは、当時の女子教育における裁縫教育論の主流を探る手掛かりとなるだろう。また、この今村の裁縫教育論で言及されていたライの筋肉運動主義に関しても、裁縫教育論の教育的価値づけに変容を生じさせた思想として検討する必要がある。その際、ライの思想を日本に紹介した小西重直の労作教育論もそれに付随する思想として言及すべきだろう。これにより、婦徳の涵養といった従来の価値づけを前提としながらも、裁縫の手指の運動という観点により焦点化した裁縫教育論という、裁縫教育の別の側面を指摘できる。

そのためにまず、明治後期以前の裁縫教育論における教育的価値づけの具体を明らかにする(第2節)。次に、今村順子の裁縫教育論を取り上げ、裁縫教育に対して技術習得だけではなく、精神陶冶に関する教育的価値づけが行われたことを明らかにする(第3節)。そして、今村の論に見られた筋肉運動主義への言及に基づき、筋肉運動主義と日本にこれを紹介した小西重直の論を検討することで、裁縫教育に対するこれらの影響を明らかにする(第4節)。最後に、全体を通した明治期から大正期にかけての裁縫教育の価値づけの変容を考察する(第5節)。

## 2 明治期の裁縫教育論

本節ではまず、本稿で対象とする今村の裁縫教育論が登場する前提として、明治前期まで裁縫教育論において裁縫教育の価値はどのように語られていたのかについて確認する。

上述の通り、明治期は近代学校教育制度が整えられつつある時代にあり、特に女兒向けの教育は整備途上であった。実際、学制発布3年目にして就学率5割を超えた男児に対し、女兒は1897年に漸く5割を超えたほどであった。また、下等小学のみでの退学者が多く、高等小学への進学が少なかったことから、高等小学に家事裁縫をおくべきとの主張もあった<sup>20)</sup>。同時期は、家庭という私的領域に位置していた裁縫を公的領域としての学校教育に位置づけるために、明治前期には裁縫科を論理的・系統的に研究し組織立てる動きが始まっており、その代表者として渡邊辰五郎と朴澤三代治がいた。渡邊は、江戸時代から仕立屋に奉公しており、その経験も生かして裁縫教育に取り組んだ。渡邊は、1880年には『普通裁縫教授書』（石川書店）を、さらに1897年には『裁縫教科書』（東京裁縫女学校）を著した。渡邊の功績として特に有名なのが、雛形尺・袖方・裄方といった型を用いた裁縫教授法の考案であり、女性が生計を立てる技術として裁縫の術を身につけられるよう、教授法を徹底的に理論化・系統化したことである。同様に、朴澤も部分縫や雛型製作の鍛錬を通じた裁縫教員の養成を一斉教授によって行うことを試み、1884年には『裁縫教授書』（楽善堂）を著した。

明治期の裁縫教育論では、裁縫の技術を女子が学ぶことは自明とされることが多かった。筆者は、1877年から1896年、すなわち明治10年代から20年代にかけて出版された書籍で、書籍名に「裁縫」の文字が含まれ、国会図書館にて閲覧可能な86冊に目を通した。それらの中には何の前置きもなく、すぐに布の裁断やしつけに関する図を用いた学習内容の説明に入るものが多かったが、その中で著者の考えが少なくとも冒頭に一定程度書かれていた書籍をいくつか取り上げる。例えば、裁縫教育に関して言及された書籍で初期のものであると、上田正庸の1877年『女学裁縫幼補』には、「抑紡績織維の道は衣食住の一にして万物の靈たる人一日も無て協わぬ要素にて昔よりは是を女子の丁むとせられたり（中略）凡婦人の身に取ては生涯第一の職務なれば縦令富貴乃家に生れて人手に此を托すとも己れこれを知らざれば常に不都合の事多し<sup>21)</sup>」とある。「貴賤貧富

の別なく」といった類の文言は他の書籍でも使用され、女は女であるが故に裁縫の知識・技術を身につけなければならないものとして語られていた。また、明治20年代に入っても、1889年『女学裁縫教授書』には「裁縫ハ婦女業務ノ中ニ於テ最モ重要ナル一科ニシテ家政処理ノ端亦此ニ在リ 左レハ人ノ婦ヲ選ブヤ必ず先ヅ裁縫ニ巧ミナルモノヲ以テス（中略）緻密ノ注意ヲ要スルガ故ニ婦女ヲシテ益々其静淑ノ美德ヲ養成セシムルヲ得ベキノミナラズ寸布分帛モ之ヲ徒消セザラント心掛クルトキハ習慣自ラ性トナリ<sup>22)</sup>」とあり、多少徳や習慣の養成といったことが言及されつつも、基本的には女たることが裁縫技術を習得することの理由として語られている。こうした語りは、儒教的女性観に基づく女性に特有の徳、すなわち婦徳の育成を求める良妻賢母主義の教育観に由来するものであると考えられる。裁縫の素養は身につけて当然とするこうした認識は1910年代以降にも続いていき、女子高等師範学校教諭の吉村千鶴子らや女子裁縫高等学院校長の小出新次郎は、裁縫の素養のない女性は「不具者」とまで断じた<sup>23)</sup>。こうした状況を踏まえてか、同時期は「家事と裁縫は、共に広範囲にわたる家庭生活に関連した事項であるのに、まったく無意識のまま指導され、特に裁縫の技術指導の重要性が強調され、戦前までにこの傾向が続く」と評価される<sup>24)</sup>。

以上より明らかになったのは、女子教育の整備が進む明治30年代より以前には、裁縫の教育的意義が深く言及されてこなかったことである。また言及されたとしても、女は裁縫をするものといった断言の形でしかなかった。つまり、明治前期の裁縫教育論では、裁縫が巧くできることが女性たりうることの前提条件として捉えられており、それ以上深掘りはされてこなかった。これ以降、第一次世界大戦や大正デモクラシーの影響によって女性像は変化していくのだが、これより少し前に日清戦争を経験した日本はその時から徐々に女子教育への関心を高め、国力を高めることと女子教育の充実が結びつくという考え方に至る<sup>25)</sup>。そして、1889年には高等女学校令が発布され、それに続く各地での高等女学校が設立されていく。当時、成女高等女学校の校長であった宮田脩は、従来の良妻賢母思想に囚われて男性に比べて地位の低い女性の状況を批判し、「一步でも半歩でも尊ばれる高い地位に進むために、できるだけ高い広い教育を受け、出来るだけ困難な職務にも当り、出来るだけ世間に認められる仕事をし遂げられるのを、衷心から賛成し、奨励し、加担したい<sup>26)</sup>」と述べた。女性観は、江戸時代以来の婦徳・

婦言・婦容・婦工という四徳を中心とした儒教的女性観<sup>27)</sup>から、女性を国民として位置づけると共にそれに似合う教育も求めるようになる「国家的良妻賢母」観へと変化しており、これに合わせて裁縫教育観も変わっていきと考えられる。

明治後期から大正期にかけては裁縫教育論で教育的価値がより意識されるようになり、裁縫は徳性の涵養に資するといった視点があらわれるのだが、それらは具体的にどのように言及されていたのか。次節以降、今村順子の裁縫教育論を取り上げることで、明治後期から大正期にかけてのこうした裁縫教育論の特徴の一つの描出を試みる。

### 3 今村順子の裁縫教育論

本節では、明治後期から大正期にかけての裁縫教育論の一つとして、普通教育の中の裁縫教育の価値づけを初期に行った人物の例として今村順子<sup>28)</sup>を取りあげる。今村は、東京女子高等師範学校にて教鞭をとっており、明治後期から大正期にかけて裁縫教育界の指導者であったとされる<sup>29)</sup>。

今村順子が著した『裁縫教授法』は1919・1920年において全国の女学校の半数近くが教科書として採用するほど普及していた<sup>30)</sup>。明治後期における裁縫の教科書は、初等教育対象のものも含めて、今村順子・小谷野千代『尋常小学裁縫教科書』、同『高等小学校裁縫教科書』、大村忠二『裁縫書』、錦織竹香『普通裁縫書』、樋口米子『新式裁縫教科書』、波佐谷美智・松島華『小学裁縫教科書』、岩間恵美・大津山壽合綱・木村愛『裁縫教授書』の7つが存在した<sup>31)</sup>。これらと比べて本書は、常見より「最も整った精練せられた教育思想を以て編まれたもの」「裁縫科を他教科と同等の基礎の上に置き、これを全国的に普及せしめたという点に於て大なる功績」と評された<sup>32)</sup>。今村が1899年に出版した『裁縫教授法』は、1898年に東京府教育会の開設に関わる夏期講習で講演したものをまとめたもので、修訂と3訂の2回にわたり改訂されたうえ、それぞれの改訂で版を重ねていることから、かなり多くの読者を獲得していたと考えられる。確認できた範囲では、最初のは32版、再訂は1908年に出版され少なくとも8版、3訂は1912年に出版され少なくとも5版の版を重ねた。さらに、今村が直接著述したものは別に今村の死後、裁縫科教授法研究会による1915年「今村順子述」の形で同題名の出版物もある。この他、1913年には『新編裁縫教科書』上中下巻<sup>33)</sup>が出版さ

れた。これらは単に技術教授法の精練だけでなく、裁縫の教育的価値づけを検討したという点において評価される。また、『大正の女子教育』でも今村の教授内容が「技術のみでなく生活指導等面の修養に」及んでいたと指摘される<sup>34)</sup>。つまり、今村の裁縫教育論において裁縫は、ただの技術修練ではなく子どもの心身の涵養にも資するものとして位置づけられ、広く受容されていたといえる。

同じ『裁縫教授法』でも、1899年版と修訂である1905年版とでは最初の総論部分の内容に差異がある。裁縫教授の沿革など単純に記載内容が増えた他、最も大きな違いは「裁縫の意義」の部分である。2つを比べてみよう。

裁縫とは、衣服に関する積り方、裁ち方、縫い方（繕い方をも包含すの）総称なり。故に此科を教授せんには、必ず以上の三者に熟達せしめんことを要す。而して積り方裁ち方は、専ら智力上の資質を要し、縫い方は、主として視力手指の熟練を要す<sup>35)</sup>。（1899年版）

裁縫とは、普通の意義にて解釈すれば、衣服の裁ち方、縫い方と云うことなれども、小学校に於て授くべき裁縫科は、啻に此の二者のみに止まらずして、衣被科の品類・性質・及び衣類に保存・洗濯等、すべて衣服に関する普通の知識・技能を授くる等のことをも、本科中に包含せしむべきものとす<sup>36)</sup>。（後略）（1905年版）

このように、1899年版は基本的に裁縫の技術習得が主眼とされたが、1905年版では、それに加えて衣服周辺の知識・技能の獲得も必要であると加筆された。1899年版においても既に、普通教育の中での裁縫教育のあり方を模索する言及が散見されたが、それらが一定のまとまりを見せたのが1905年版以降のものとなる。

1905年版以降の今村は、裁縫教育を普通教育の中で捉える、すなわち児童生徒の人格陶冶が教育全体の目標としてあるとすれば裁縫教育がそれにどう資するかを考えていた。今村にとって教育は、「既に成熟したる人が、心身共に未だ成熟せざる人に対して、完全なる発育即ち独立自裁の力を得しめんがために、施す所の有為の作用」<sup>37)</sup>であり、教育的教授とは、知識・技術の伝達にとどまらず「身体及び心意所作用の発達に留意し、品性を陶冶せんことを務むるもの」<sup>38)</sup>のことを指した。その中で裁縫教育に関して今村は、裁縫を

「一種の技術」として縫製技術の習得を目指すとしつつも、技術だけでなく「児女心身の発育に意を留め、他の諸学科と相連絡し、相補佐して、教育の成功を期し、中にも徳性の涵養に至りては、特に注意して教授すべきもの」<sup>39)</sup>とした。他方、人間が天性と習慣とにおいて男女でその執る務めが異なるため、裁縫は「女子の生活上に於て最も必要なるもの」<sup>40)</sup>として性別役割分担的思想も受け継いでいた。さらに、衣服の縫製に関する技術や周辺の知識を習得するだけでなく、有事の際に必要な意思の強さといった精神的な鍛錬も、裁縫を通じて達成されると主張した。それは、学校教育における本源的目標としての「人を造くる(ママ)」ことにつながるともする<sup>41)</sup>。

今村が出した『裁縫教授法』は再訂版以降、実用的価値だけではなく裁縫教育の形式的価値として、諸徳性の涵養の詳述が追記される。こうした二元論は当時の教育の目的論としては他教科においても適用されており、沢柳政太郎によれば「実質的目的は人生に必要な知識を授ける。形式的目的は精神能力を発達せると説いて居る」とする<sup>42)</sup>。これは明治20年代以前にはなかった記述であり、今村の『裁縫教授法』再訂版が出された時代、すなわち明治30年代における特異な傾向といえる。涵養できる徳性は、(1)忍耐の気象を養い緻密の思想を練る、(2)観察思考の力を増す、(3)美感を養成する、(4)秩序・清潔・整頓等の良習慣を養う、(5)節約・利用の価値を得しむ、の5点に集約される<sup>43)</sup>。この5点の他、細かいものだと、勤労を厭わない習慣の涵養、社会的階級に合わせた衣服の制作法の習得、「眼を練習し、手の筋肉をして精確・敏活なる運動」<sup>44)</sup>に慣れること等を挙げている。これら裁縫教育の教育的価値に挙げられた徳目は、修身科において挙げられているものと重なる部分が多い<sup>45)</sup>。実際今村も、「裁縫は、児女をして、実地に行わしめること多きを以て、修身科に於て教授したる諸種の徳を、実践せしめる機会多し」<sup>46)</sup>とし、修身科で教授された概念としての徳目が、裁縫を通して身につけられるものとして捉えていた。

さらに、今村の裁縫教育論には海外からの思想が幾つか参照されており、その中には「ドクトル・ライ」の筋肉運動主義が含まれていたのが特徴的である。明治後期における裁縫重視の女子教育確立の流れは、当時ドイツの作業主義・経験主義の教育が世を風靡し、その影響を受けたことも否定できないとある<sup>47)</sup>が、これもその一つと考えられる。1915年版の中での加筆事項の一つとして、ドイツの「ライ氏」が提唱した

「筋肉運動主義」の引用がある。今村は、婦人の徳の涵養に裁縫が有効であると述べた後、従来の単なる「心の教育」に傾注する教育への危惧を示し、「手や何かの教育」も重視すべきとした。つまり、ただ修身の授業でテキストを読み、教訓・徳を字面で学ぶだけでなく、裁縫等の作業によってその徳を体得すること、そして徳の体得の有無を問わず、身体を動かすことそのものにも教育的価値を見出した。そして、裁縫や手工などの「微妙な運動」は、特に作業をするそれだけで効力があると実験によって明らかにされていることに着目し<sup>48)</sup>、裁縫の教育的価値の一つとして作業を行うことそれ自体に見出している。この「ドクトル・ライ」の「筋肉運動主義」は今村以外のいくつかの裁縫教育関係の書籍で引用されていたが、具体的にどのような主張で、なぜ裁縫教育において引用されたのか、次節で検討する。

#### 4 「ドクトル・ライ」の筋肉運動主義

本節では、前節で取り扱った今村や後述する高橋並びにその他の裁縫教育論において引用された「ドクトル・ライ」の「筋肉運動主義」について言及する。筋肉運動主義はドイツの新教育の主潮の一つを形成していた実験心理学に位置づけ、日本では小西重直によって労作教育と共に紹介され、裁縫や手工など手指を用いる教育にてその思想が受容された。本節では、筋肉運動主義の小西における受容を彼の書籍や論考を基に明らかにした上で、さらに裁縫教育論とどう適合していったのかを考察する。

##### A 筋肉運動主義

ドイツにおいて1890年代に始まり1933年にナチス政権が成立するまで、各地で展開された様々な教育改革運動のことを「改革教育学」や「改革教育運動」と呼ぶ。一言に「ドイツの改革教育運動」といってもいくつかの系譜に分かれており、その分け方も数種類存在するが、例えばイエナ・プランで有名なペーターゼンは、(1)子どもの全体的自我の自由な表現を重視した芸術教育運動、(2)ケルシェンシュタイナー、ガウディッヒの主張に見られる労作学校運動、(3)ライ、モイマンによって開拓された実験心理学の教育学への導入(実験教育学の発達)、(4)リーツなどで知られる田園教育舎運動の4つに分けている<sup>49)</sup>。ペーターゼンは、ライとモイマンの実験教授学の思想に刺激されており、「教育科学」の全構想の中に「教育学的事実研究」

の研究領域を開拓し、今日の授業研究の発展への先駆的な役割を果たしたものとして、改革教育学の一つの大きな流れとして彼らを位置づけていた<sup>50)</sup>。

筋肉運動主義とは、ドイツのカールスルーエ第二師範学校長を務めたヴィルヘルム・アウグスト・ライが提唱したものである。ライは「ドクトル・ライ」と日本では称され、ヴント心理学に依拠するエルンスト・モイマンと共に、ヘルバルト派に反旗を翻し実験的・統計的手法に基づく経験科学としての教育学を目指した実験教育学の祖として位置づけられ、代表的な著作としては1903年出版の『実験教授学』が挙げられる<sup>51)</sup>。

実験教育学は日本でも明治40年代に導入され、主に小西重直が紹介した。特に1908年から1909年にかけてが、実験教育学の研究を紹介・解説した著作のピークである<sup>52)</sup>。筋肉運動主義とは、感覚中枢や連想中枢の働きによるところの直観主義や開発主義よりも、運動中枢の働きによる筋肉運動を重んじる考え方とされた。小西は、1901年から3年間ドイツとイギリスに留学しており<sup>53)</sup>、その際、当時のドイツにおいて広まっていた労作教育と芸術的教育の思潮の影響を大いに受けた<sup>54)</sup>。教育における意志の問題や生理学的な問題への関心が元々高かった小西は、このドイツ留学中にライの著書にも触れ啓発されたのかもしれない。裁縫教育家たちも、小西によるライの紹介を通して彼の思想に触れたと考えられ、以下、小西によるライ受容と彼の労作教育への関心を中心に見ていく。

筋肉運動主義は、「勤勞的教育又は勤勞学校」とされ、「学習的教育又は学習学校」としての主知主義と対置される。小西は、ライの筋肉運動主義をアメリカ進歩主義のフランシス・W.パーカーの活動主義に類するが、また別の特色を持つものと捉える<sup>55)</sup>。というも筋肉運動主義の場合、「観念に生氣を与え、又確實にして且之を永続せしむ」と捉え<sup>56)</sup>、「筋肉感覚の一種の不可思議なる力がある<sup>57)</sup>」としたからである。そしてそれは、実際に体を動かす言語学習や図画・細工物の制作と結びつき、身体を動かすことの学習効果の高さを指摘する。また、「筋肉運動主義の教授法は、意志の鍛錬に有効なり<sup>58)</sup>」ともする。意志の鍛錬には内部的意志修練と外部的意志修練の2方面があり、筋肉運動主義は従来重視されてこなかった外部的意志修練を達成する性質がある。すなわち、ただ読書をして道徳的観念を学ぶ「静的修養」ではなく、筋肉運動に基づく表現の発表や実行といった技能の修練に伴って徳育訓育上の基礎的性格を形成する「動的修養」が可能なのである<sup>59)</sup>。

小西が紹介したライの主張には、実践家として学校

教育における身体活動を伴う作業の有用性について論じた部分があった。小西によるライ受容に関して沢柳は「小西君は主としてライと云う人の『実験教育学』の著書に負う所が多いので」あり、「能く消化して居る」と評価する<sup>60)</sup>。小西の関心は、ライの教育学説に学んだ心身一元の人間観から労作教育論へと発展していくが、大正期以降は、実験教育学の精神である実証主義とは距離を置く形でその研究は進行していく。実験教育学の要素を学びつつ、教育研究活動を修養としての自己形成の一環として捉えていた小西にとって、実証主義の部分を積極的に継承することはしなかった<sup>61)</sup>。

小西重直はドイツの労作教育に関心を寄せ、1935年に『労作教育』を出版する。小西のいう「労作」とは、「精神的労作を離れた筋肉運動は機械的な運動で、真の労作ではない。筋肉的労作によりて内面修練が一層確實となるが、内面の修練なくしては筋肉的労作の発展も不可能である<sup>62)</sup>」という言葉に表れているように、霊(的精神性)と肉(筋肉的身体性)という人間本性の一元的統一化を目指すものであった。特定の宗派的宗教を信心・信仰するには至っていないが、小西の教育学の出発点は宗教にあると既に稲葉宏雄が指摘するところだが、稲葉によれば、小西にとって「霊の自発性、自己陶冶性を絶対価値、絶対真実性(神・仏)に方向づけることを可能にする教育方策」が「労作」である<sup>63)</sup>。また、小西は「労働」と「労作」の違いにも言及する。実社会における「労働」は「手段価値」であり、その結果・成果物が「目的価値」となる。他方、教育・学校における「労作」は、労作することそのものが経験としての価値であり、人格発展に役立つものとして捉えられる。小西は、ドイツの心理学者、ウィリアム・シュテルンが『価値の哲学<sup>64)</sup>』という書籍の中で言及した目的価値と手段価値の外にある「放射価値」に言及し、労作はこの「放射価値」言い換えて「中間価値」に相当するものとして位置づけている<sup>65)</sup>。「筋肉を通しての自発的な霊肉交渉の過程としての労作は教育上最も具体的に活々と人格構成に役立つのである<sup>66)</sup>」として、教育としての価値を有する「労働」を「労作」と呼んだのである。そして、「労作」としての活動は、身体活動を伴う作業が記憶や確信に作用すること、そして精神鍛錬にも寄与することであったが故に、実用的技術の習得という目標以外の裁縫教授の価値を説明する根拠として引用されることとなったといえる。

## B 裁縫教育論における筋肉運動主義

裁縫教育史は従来、日本における教育史あるいは女性史の中でのみ語られてきたが、上述のような今村によるライへの言及をみると、裁縫教育は、新教育からの影響、特にドイツ新教育に位置する筋肉運動主義並びに労作教育からの影響を受けていたと指摘できる。

上述の小西もその著書『労作教育』の中で、「教育に於ては、必ずしも芸術的創作を目的とする場合のみに限らず、身体的運動によりて行わるる一般広義の構成的な働きに於ても、或る程度迄これを美的に構成し得るのであるから、美的労作は一般の構成作用に於て多分に、実現され得る」<sup>67)</sup>と述べ、さらに具体例として「裁縫、手工、図画等に於る創作的乃至構成的過程を要する技能的なものや、体操の如く身体的運動其のものを主とするものに於ても美的労作が可能」<sup>68)</sup>とする。このように、労作が示す範疇に裁縫が含まれていることを明示した。

今村の他にも、東京女子高等師範学校の助教授兼教諭を務めた高橋イネ子は、1925年文書堂出版の『裁縫教授法』において、海外の教育言説を紹介する箇所「獨逸のライ氏は意志と知識を得るには筋肉を動かさねばならぬと説き」<sup>69)</sup>と紹介した。さらに、裁縫教育の知育としての価値について、「ライ氏は又手足と脳神経中枢との関係を研究し、技芸教育を低脳児教育に利用し知力の発達を計りつつある程であるから、裁縫も教授法の宜しきを得れば、確かに知力の発達を助けることが出来る」<sup>70)</sup>とする。高橋によるライの引用の場合、彼の知見を、裁縫の過程で育成できる精神陶冶といった側面だけでなく、一般的な知育、観察・記憶・創造・思考・推理・判断力といった力の涵養も裁縫を通して可能になるという根拠として用いていた。つまり、ライの筋肉運動主義は、日本の裁縫教育論において、学校教育における手作業に従事することの意義そのものを補強したとともに、女子に特有の徳を涵養するだけでなく、知力の育成といった別の教科にも援用可能な能力の育成も可能にする作業として、裁縫を位置づけることを可能としたのである。これは上述の今村によるライへの言及の意図とも重なるだろう。

このように、ライの筋肉運動主義や労作教育といったドイツの新教育関連の思想が日本に紹介され、手技という点で親和性の高い裁縫教育論への援用が比較的容易であった思想が故に、裁縫教育論において裁縫の一つの教育的価値を説明する根拠として受容された。これは、明治前期までの裁縫教育論には見られなかった傾向であり、小西の議論を借りるならば、従来の裁

縫教育がどちらかと言えば「目的価値」に重点を置いていたのに対して、女子教育の拡充が進む中で、そしてこうした海外の教育思潮を受容する中で、「中間価値」すなわち裁縫をすることそのものの価値にも意識を傾けるようになったといえる。また、こうした受容は、同時代の大正新教育運動における子どもの自主性に重きを置く「子ども中心主義」的な思想の流れとはまた異なる、身体を活用することに価値を置いた教育思想の潮流として受け取ることができる。そして、そうした流れの中に、裁縫教育が含まれていたということになる。

## 5 おわりに

本稿の目的は、明治期から大正期にかけて、裁縫教育論における教育的価値づけがどのような変容を遂げたのかを明らかにすることであった。そのために、今村順子の裁縫教育論、そしてドイツ新教育の系譜に属するライの筋肉運動主義とそれらの裁縫教育論の関係を検討してきた。明治前期においては、女子が裁縫を習うことは自明のこととして特に具体的な根拠づけなしに、裁縫教育が推奨されていたが、明治後期になってそうした言説がどう変容してきたのか。以上の検討より明らかになったことを、3点挙げる。

第一に、明治20年代以前は、裁縫教育の教育上の意義についてはあまり論じられてこなかったということである。多くの裁縫或は裁縫教育関連書籍では、女性は裁縫をすべき存在であるという断定に終始し、すぐさま運針や襦袢の縫い方といった裁縫の中身の話に入っていた。こうした書きぶりの背景には、江戸時代以来の四徳のうちの一つである婦巧に従って、裁縫を含めた家政上の諸技術は無批判に身につけるべきものという認識が浸透していたことがあると考えられる。

第二に、明治30年代以降は、裁縫教育の意義を論じる際に技術の習得だけでなく、今村や他の実践家たちもそうだが、実用的価値と形式的価値の2つで捉えるようになったことが指摘できる。形式的価値とは、忍耐や節約利用の習慣といった女性に期待される徳の形成、思考力や観察力といった性別に関わらず児童生徒一般が身につけることを期待される能力の形成のことを指す。明治20年代以前と異なり、女子教育への関心の高まりも相まって、裁縫教育における教育的意義への言及が増えた。その中で、縫製の技術・知識だけでなく、裁縫を通じた女子の人格形成全般が期待されるようになり、裁縫の教育的意義が拡張されたというこ

とができるだろう。

第三に、明治期から大正期にかけての裁縫教育論の一部は、ドイツ新教育の系譜に位置づくライの筋肉運動主義の影響を受けていたということである。ライの教育思想を日本に伝えた小西は、労作教育へも関心を広げ、その中で精神の陶冶と身体的活動は一体であると主張した。ライは、手指を動かすという行為そのものを重視し、知識伝達だけの教養的修養ではなく、身体活動を伴う学習に価値を見出す考え方を促した。それを踏まえた小西の労作教育思想は、裁縫を通じた女子の人格陶冶を目指した裁縫教育実践家たちにとって、受容しやすい思想だったのである。

本稿では書籍化されている史料から裁縫教育論を言説レベルで分析したが、これらが実際に学校現場において教師たちによって受容され、実践にどのように生かされていたのかについての検討までは踏み込めていない。これらを検討するには、個別の学校や実践家の史料へあたるといった作業が必要となっていくが、それらは今後の課題としておく。

(引用文中の旧字体・旧仮名遣いは新字体・現代仮名遣いに改めた。)

## 注

- 1) 深谷昌志『良妻賢母主義の思想 増補版』黎明書房, 1981.
- 2) 小山静子『良妻賢母という規範』勁草書房, 1991, pp.48-49.
- 3) 同上, pp.55-57.
- 4) 常見育男『家庭科教育史』(光生館, 1959), 常見育男『日本家事教育発達史』(創元社, 1938).
- 5) 関口富左「女子教育における裁縫の教育史的研究—江戸・明治両時代における裁縫教育を中心として—江戸時代における市民生活と女子」(『家政学雑誌』31巻10号, 1980, pp.46-55), 関口富左「女子教育における裁縫の教育史的研究—女子不就業対策と裁縫教育—」(『家政学雑誌』32巻7号, 1981, pp.31-36), 関口富左「女子教育における裁縫の教育史的研究—江戸・明治両時代における裁縫教育を中心として—」(『家政学雑誌』32巻1号, 1981, pp.11-24), 関口富左「女子教育における裁縫の教育史的研究—江戸時代における女子教育と裁縫習得の実態—」(『家政学雑誌』32巻5号, 1981, pp.34-46), 関口富左「女子教育における裁縫の教育史的研究—「府縣教則」よりみた裁縫教育の実状について(明治8~9年)—」(『家政学雑誌』32巻5号, 1981, pp.47-51).
- 6) 田中陽子「明治期における小学校の和裁教育: 教授書・教科書よりみた内容および方法」(『日本家庭科教育学会誌』39巻3号, 1996, pp.1-6), 田中陽子「明治期における小学校「裁縫科」の教材配列」(『北海道教育大学紀要第二部C家庭・養護・体育編』47巻1号, 1996, pp.1-6), 田中陽子「明治期の裁縫教授書類における教授媒体としての「図」」(『北海道教育大学紀要第二部C家庭・養護・体育編』47巻2号, 1997, pp.309-315), 田中陽子「裁縫・大正期の小学校裁縫科教授法(第一報): 裁縫科教授定型過程と実践上の問題」(『日本家庭科教育学会誌』42巻2号, 1999, pp.31-38), 田中陽子「裁縫・大正期の小学校裁縫科教授法(第二報): 教授法重視の影響」(『日本家庭科教育学会誌』42巻2号, 1999, pp.39-45), 田中陽子「裁縫・大正期の小学校裁縫科教授法(第三報): 大正期の裁ち方教授」(『日本家庭科教育学会誌』43巻3号, 2000, pp.185-192), 田中陽子「裁縫・大正期の小学校裁縫科教授法(第四報): 手工科教授との関連」(『日本家庭科教育学会誌』43巻3号, 2000, pp.193-198), 田中陽子「大正後半期から昭和初期小学校裁縫科教材論」(『日本家庭科教育学会誌』46巻3号, 2003, pp.207-215), 田中陽子「『裁縫』から『被服製作』への展開過程における裁縫と手芸」(『相愛大学研究論集』26巻, 2010, pp.125-139), 田中陽子「小学校裁縫科における裁縫と手芸の統合的扱い」(『日本家庭科教育学会誌』54巻2号, 2011, pp.108-117). なお、戦時下における裁縫教育に関する研究も数点あるが、それらは本稿の射程から出るため、ここでは省略する。
- 7) 関口富左「女子教育における裁縫の教育史的研究—女子不就業対策と裁縫教育—」(『家政学雑誌』32巻7号, 1981, pp.31-36).
- 8) 常見育男『日本家事教育発達史』創元社, 1938, p.122.
- 9) 桑田直子「市民洋装普及過程における裁縫科の展開とディレンマ—成田順の洋裁教育論を中心に—」(『教育学研究』65巻2号, 1998, pp.1-10).
- 10) 田中陽子「明治・大正期の小学校裁縫科における洋裁技術の受容: 和裁への適応」(『日本家庭科教育学会誌』42巻3号, 1999, pp.17-23).
- 11) 田中陽子「小学校裁縫科における洋裁教育推進の背景: 大正後半期から昭和戦前期を中心にして」(『日本家庭科教育学会誌』47巻1号, 2004, pp.38-47).
- 12) 赤崎真弓・多々納道子・小林葉子・福田公子「木下竹次の裁縫教育の成立と展開—『裁縫新教授法』『新裁縫学習法』『裁縫の創作的学習法』及び『裁縫学習の建設』について—」(『教育学研究紀要』26巻, 1981, pp.491-498).
- 13) 多々納道子・福田公子・赤崎真弓・小林葉子「木下竹次の裁縫教育の成立と展開—成立期における裁縫科の教育的価値—」(『教育学研究紀要』27巻, 1982, pp.479-492).
- 14) 福田公子・多々納道子・赤崎真弓・藤原純子「木下竹次の裁縫教育の成立と展開—評価活動について—」(『教育学研究紀要』29巻, 1984, pp.452-455).
- 15) 赤崎真弓・多々納道子・福田公子・藤原純子「木下竹次の裁縫教育の成立と展開—合科学習について—」(『教育学研究紀要』32巻2号, 1987, pp.349-359).
- 16) 藤原純子・多々納道子・福田公子・赤崎真弓「木下竹次の裁縫教育の成立と展開—裁縫教師の養成について—」(『教育学研究紀要』30巻, 1985, pp.480-483).
- 17) 福田公子・多々納道子・赤崎真弓・藤原純子「木下竹次の裁縫教育の成立と展開—中沢か寿め氏を中心とした個人史にみられる影響—」(『教育学研究紀要』31巻, 1986, pp.455-458).
- 18) 田中陽子「大正自由教育の小学校裁縫科教授法への影響と限界」(『日本家庭科教育学会誌』46巻2号, 2003, pp.103-113).
- 19) 伊藤瑞香・永野順子「明治時代の中等教育における裁縫科の内容分析: 高等女学校を中心として」(『日本服飾学会誌』13号, 1994, pp.10-19). においても、高等女学校と実家高等女学校の裁縫教科書の比較として、高等女学校の代表例として今村の著した

- 『新編裁縫教科書上下』(1913年, 成美堂書店・目黒書店)を使用していることから、その普及の程度がうかがえる。
- 20) 日本女子大学女子教育研究所編『大正の女子教育』国土社, 1975, p.77.
- 21) 上田正庸編『女学裁縫幼補』江藤喜兵衛, 1877, pp.2-3.
- 22) 金田孝女『女学裁縫教授書上巻』金田孫三郎, 1889.
- 23) 吉村千鶴子・中川真砂子(『新令適用裁縫教授法』東京裁縫女学校編, 1908), 小出新次郎(『裁縫術団体教授之真髓』女子裁縫高等学院出版部, 1910).
- 24) 前掲20, p.79.
- 25) 姜華『大正デモクラシー期の修身教科書に見る良妻賢母教育の変容: 下田次郎編『女子新修身書』改訂版を中心にして』『アジア教育史研究』21巻, 2012, pp.33-48.
- 26) 宮田脩『良妻賢母論』家庭文庫, 1916, p.10.
- 27) 平塚益徳『第二編女子教育の研究』『平塚益徳著作集第1巻日本教育史』教育開発研究所, 1985, p.135.
- 28) 旧姓は「谷田部」という。本文では「今村」と表記を統一し、以降、引用の注釈に関しては1899年版と1905年版は書籍における表記の通りに「谷田部」と記載する。
- 29) 前掲8, p.122.
- 30) 前掲8, p.122.
- 31) 前掲8, p.121.
- 32) 前掲8, p.124.
- 33) 今村順子『新編裁縫教科書』上・中・下巻, 成美堂書店・目黒書店, 1913.
- 34) 前掲20, p.91.
- 35) 谷田部順子『裁縫教授法』成美堂, 1899, p.2.
- 36) 谷田部順子『裁縫教授法』目黒書店・成美堂, 1905, p.7.
- 37) 同上, pp.2-3.
- 38) 同上, p.3.
- 39) 谷田部順子『裁縫教授法』目黒書店・成美堂, 1909, pp.1-2.
- 40) 同上, p.7.
- 41) 今村順子『裁縫教授法』裁縫科教授研究会, 1915, p.8.
- 42) 沢柳政太郎『沢柳全集第一巻』沢柳全集刊行会, 1924-1925, p.330.
- 43) 前掲39, pp.18-21.
- 44) 前掲39, p.21.
- 45) 1902年の文部省編『高等女学校用修身教科書』を参照すると、衛生や質素といった項目が重なるだろう。
- 46) 前掲39, p.27.
- 47) 文部省編『産業教育八十年史』大蔵省印刷局, 1966, p.116.
- 48) 前掲41, p.44.
- 49) ベーターゼン, P. 三枝孝弘・山崎準二(著訳)『学校と授業の変革: 小イエナ・プラン』明治図書出版, 1984.
- 50) 中野光『戦後ドイツ教育史』御茶の水書房, 1966, p.64.
- 51) 木内陽一「実験教育学の終焉: 新教育運動における教育理解と科学理論的基礎づけのずれ」『教育哲学研究』61巻, 1990, pp.50-63.
- 52) 三石初雄「第二章「科学的」教育学研究の成立と実験教育学—阿部重孝の「科学としての独立」の提唱を中心に—」『教育科学研究』2巻, 1983, pp.97-108.
- 53) 加藤仁平『小西重直の生涯と思想』黎明書房, 1967, p.49.
- 54) 小西重直『労作教育』玉川学園出版部, 1930, pp.3-4.
- 55) 小西重直『現今教育の研究』同文館, 1912, p.179.
- 56) 同上, p.186.
- 57) 同上, p.187.
- 58) 同上, p.188.
- 59) 同上, pp.189-191.
- 60) 前掲42, p.317.
- 61) 小西純「『実験教育学』と初期小西重直—『学校教育』(1908・明治41)の場合—」『大谷女子大学紀要』17巻1号, 大谷女子大学志学会編, 1982, pp.111-126.
- 62) 前掲54, p.2.
- 63) 稲葉宏雄「昭和期における小西重直の教育思想—「敬・愛・信」と「労作」の教育—」『龍谷大学論集』457号, 2001, pp.50-75.
- 64) 小西が指している書籍は, Leipzig: Barth から1924年に出版された“Person und Sache (人との)”の第3巻『価値の哲学』と推測される。(第1巻は1906年に出版されている。)
- 65) 前掲54, pp.135-136.
- 66) 前掲54, p.149.
- 67) 前掲54, pp.182-183.
- 68) 前掲54, pp.182-183.
- 69) 高橋イネ子『裁縫教授法』文書堂, 1925, p.40.
- 70) 同上, pp.41-42.

(指導教員 浅井幸子教授)